
京大上海センターニュースレター

第4号 2004年5月10日

京都大学経済学研究科上海センター

目次

○ 韓国社会の情報化

韓国社会の情報化

3月23日から一週間、資料収集のため韓国に出張した。その際、研究の分野における情報化について思うところがあったので、ここに紹介する。

私は、かつては毎年必ず数回は韓国を訪れていたが、その後研究テーマが変わったために足が遠のいていた。とくに、さまざまな研究機関や資料館、図書館を一度に回るのは久しぶりであったが、その変化の大きさに驚かされた。その変化とは、文献情報の電子化、閲覧利用施設のIT化のことである。

私が足しげく通っていた1990年代の前半には、韓国研究機関のIT化はさして目立つものではなかった。1990年最高学府であるソウル大学図書館の貸出し制度は、まだ図書の裏表紙に挟んでいる貸出しカードに手で書いて、閲覧職員に渡すというものであった。検索もすべて戦前から続いている蔵書カードで行っていた。95年の時点でも、変わったのは図書館入館チェックの身分証明書が電子カードになり、図書に持ち出し防止の電子ラベルが張られていたぐらいであった。

ところが今回行ってみると、まったく様変わりしていた。まずどこの図書館でも、ホールからあの大きなカードボックスが消えていた。いうまでもなく、所蔵図書をすべて電子検索できるようになっていたのである。日本の大きな図書館では、膨大な労力を要する遡及入力はどこもあまり進んでいないが、韓国は主要図書館ではすべて入力済みのようだ。書名の検索だけでなく、国会図書館や国立中央図書館では、本の目次まで入力されており、内容まで拾えるので検索能力が格段に高まっていた。さらに驚いたのは、本の中身自体の電子化も進められていたことである。最近の出版物から古い資料まで、どのどん画像化され取り込まれていた。全体としてどれほど電子化しているのかは不明だが、私の使う戦前の古い資料ですら過半がすでに画像化されていたのには心底驚いた。職員によれば、現在も電子化の作業が進められており、遠からずこの作業は完了するとのことであった。

当然に利用方法はまったく変わっていた。閲覧室はパソコンの端末機で埋め尽くされており、利用者の大多数は文献をディスプレイ画面で読むのである。出納掛りに申請するのは、まだ電子化されていないものやごく最近の出版物のみである。以前、出納台の前の広い

待合い席で大勢の利用者が本の出てくるのを待っていたのに、今ではほんの数人が待っているだけである。事実上、図書館は本や雑誌自体を閲覧させるのではなく、文献を保存し電子形態で利用に供するという機能に変わりつつあったのである。

利用者は、ディスプレイで見て必要な箇所をボタン一つで複写することもできる。これは、私のように短時間で資料集めをしようとする者にとっては、非常に便利なシステムである。本1冊を何の苦労もなくコピーできるのであり、限られた時間のなかで作業能率は格段に高まった。ただし、著作権のある文献については、学位論文以外はプリントすることはできないようになっている。逆にいえば、著作権のない本は、図書館に直接出向いて来ることなく、自分のパソコンを通じて検索し内容を読み複写できるのである。まさに、IT技術の進展で、図書館の機能や文献収集のやり方が、急速に変わりつつあると感じた。ただ、この過程はペーパーレスの方向とはまったく違う。職員はいつも山のような紙束を抱えて、閲覧席の間を忙しく配って回る。利用者各自が手軽にプリントするために、紙の使用量は劇的に増えているようであった。

どうしてこのように韓国図書館のIT化が急進展し、日本を追い抜いたのかという点に関して、おもしろい解説をきいた。それは、本の画像での取り込みや入力作業という労働集約的な作業は、1997年金融危機で失業者が急増した時期に、政府が失業者救済政策の一環として財政資金を投入して雇用した労働者によって集中的に進められたのだとのことである。

隣国で起こったこのような図書館IT化の流れは、国会図書館関西分館でもみられるように、やがて日本でも同じように進展してくると思われる。考えさせられる近未来のモデルともいえよう。

(堀和生)

+++++